

歴史における武力の諸形態とエスニシティ

— 考古学的分析への予察 —

松木 武彦

はじめに

考古学は、物質として遺された人間行動の痕跡から、過去の事実や社会を復元する学問である。それが分析対象とするさまざまな人間行動のうち、戦いという行為は、その性質上、もっとも明瞭な物質的痕跡を遺す。それゆえに、考古資料を用いて戦いやそのための施設・集団などを復元しようとする試みは少なくない。

しかし、戦いという行為の多彩な実態や、それぞれの実態の戦いが有する物質的および観念的なさまざまな側面についての考究はまだ緒についたばかりであり、それらと、その物質的痕跡である考古資料との照応の作業は今後の課題である。

本稿では、考古学が過去の人間行動を復元するときの行為主体として設定する集団のうち、近年意識的に取り上げられつつあるエスニシティという概念を分析軸として、上記の課題に取り組むための予備的な考察をおこなってみたい。

1. 戦いに関する考古学的研究の現状と課題

日本考古学では、戦いに関する考古資料のうち、遺物としての武器・武具の分析は古くから盛んであった。しかし、人間行動としての戦いという行為を意識的に分析対象としたのは、佐原真の一連の論考が最初である。

戦いに関する佐原の論考は多数に及ぶが、もっとも近年の論考では、戦いのうち「多数の殺傷をとめない得る集団間の武力衝突」ととくに「戦争」とよび、それを証拠だてる考古学的事実として、次の六つを挙げている。1) 守りの村=防禦集落(町・都市)、2) 武器、3) 殺傷(されたあとを留める)人骨、4) 武器の副葬=遺体に副えて武器を葬る、5) 武器形祭器=武器の形を模した祭り・儀式的道具、6) 戦士・戦争場面の造型(佐原1999)。

これらの存否や頻度と生業形態との関係について、国際的に多くの事例から検討した結果、佐原は、狩猟採集社会よりも農耕社会において、上のような諸要素、すなわち「戦争」を証拠だてる考古学的事実の出現頻度が高いことを明らかにした。言い換えれば、「戦争」は、農耕社会ないしその成熟過程で本格的に生み出されてくると結論付けたのである。

その要因については、農耕の定着にともなう生産力の増強が富を発生させ、その争奪が「戦争」

の契機になると佐原は考えている。生業形態の特質とそれに基づく経済条件に、戦争の要因を見出しているのである。戦いの要因を経済条件に求める考えは、具体的な内容はそれぞれ異なるが、都出比呂志や橋口達也、筆者らも展開している（都出 1989、橋口 1995、松木 1995）。

佐原の説には、現代社会へのメッセージとしての性質もあった。「戦争」の発生源を農耕という二次的に獲得された生業形態に求めることにより、人間社会には本源的に「戦争」が存在しなかったと説く。

これら一連の佐原の説は、過去の戦いという行為を、日本考古学において初めて体系的に復元し、その社会背景や発生要因にまで考察を及ぼした学史的な達成であるが、これをさらに深化・発展させていくための視座として、次の二つの問題がある。第一に、佐原の研究までの時点では、「戦争」の多様性や、次章で検討するようなそれに付帯する諸事象にわたる多角的な分析は、まだ本格的になされていない。佐原の学説のメッセージ性ともあいまって、ともすれば社会を「戦争」と「平和」との二元論で評価しがちな傾向もある。そこでの「戦争」「平和」というのは、学問的・客観的に練磨された判断基準によったものではなく、それぞれ異質の位相の基準によって導かれたなかば情趣的な評定であり、政治的・社会的にはメッセージ性の強い形容概念とはなりえても、社会の学問的・客観的評価の概念とはなりにくい。また、一般に「戦争」といい「平和」とよぶ状態の具体的な内容も、きわめて多様であることに注意すべきであろう。

第二の問題として、とくに佐原の研究においては、比較的単純な狩猟採集社会に「戦争」が稀である事実と、人間という動物自体に生得的な攻撃性（俗にいう「闘争本能」）がなかったという想定とが直結されすぎたきらいがある。人間という動物がもつ攻撃性に関しては、霊長類学などの近年の研究成果によると、その存否を確定できる見通しは大きくないようである。いっぽう、戦争とはあくまでも社会的に組織化された行為であり、個々の人間行動の単純な延長線上の事象として現れるものではない。生得的な攻撃性と戦争の発現とをじかに関連付けることはできないし、ましてや、いまだに確定されない人間の攻撃性の存在否定をもって現代ないし未来の戦争抑止の可能性を説くのは、学問的な意味では慎重さに欠けるとのそしりを受ける危惧もあろう。

2. 戦いの考古学的指標の再吟味

以上のような課題を見据えつつ、主として佐原によって進められてきた戦いに関する考古学的研究を深化・発展させる試みに着手してみたい。まず、「戦争」の考古学的証拠として佐原が挙げた上記の6指標が、戦いやそれにまつわる多様な諸事象のどの側面をもっとも直接的に反映する可能性が高いか、あらためて吟味してみたい。

1) 守りの村＝防禦集落（町・都市）は、まずそれが実際に、ないしは純粹に戦いに備えたものであったかどうか、つねに問題となる。日本列島におけるその代表例といえる弥生時代の環濠集落の場合、実用的な防禦施設というよりもむしろ、集団の共同意識や一体感など、観念的內

容を演出する記念物的な施設としての意味を一義的とみる考えが近年有力である(寺沢 2000 など)。もとより、環濠集落も含めた防塞集落・城壁・城郭などの防禦施設は、その性質上、当初から顕著な視覚性をもっているために、そのような実質以上の観念的機能を帯びやすい。日本列島の中世城郭から近世城郭への推移は、観念的機能の側面の増大と、それに比例する視覚性の発達の典型といえる。この場合、近世城郭のほうが物質上は著大な痕跡を遺すが、実質上の戦闘の頻度はむしろ低下している事実などは、この種の資料を解釈する際に留意すべき事柄であろう。

2) **武器**は、狩猟具や農工具との区別の作業がまず不可欠であり、さらにそれが実用可能か否かという困難な判断を要する。実用武器の存在が認定できた場合は、その社会に戦いの行為が存在していたか、存在した経験をもっていた可能性が高い。「存在した経験」というのは、ひとたびその社会に武器が現れると、それを必要とした戦闘状況が終焉したのちも、消滅することはきわめて少ないとみられるからである。たとえば社会の内的統合をもたらす戦いの行為が終結した後、それに用いられた武器は統合の中核に集められ、統合を維持するために誇示ないし行使される場合がある。このような、権力による「平和」は武器を必要とするのである。あるいは、内的統合の次段階として対外的な戦いに振り向けられる場合もあろう。

3) **殺傷(されたあとを留める)** 人骨は、戦いという行為の中で生じる、他人の肉体に対する加撃行為の存在を直接的に証拠付ける物質的痕跡である。ただしそれは、佐原が「戦争」とよぶような、社会的に組織された戦いの行為においてのみ発生するとは限らず、私闘や狭義の「殺人」、処刑、「王殺し」のような儀礼的殺人、あるいは偶発的な事故などの場合にも遺されうる。筆者は近年、弥生時代日本列島の殺傷人骨や武器が嵌入した遺骸痕跡を詳細に検討し、処刑ないしは儀礼的殺人行為により生命を奪われた可能性が高い事例のいくつかを抽出した(松木 2000・2002)。

4) **武器の副葬**は、2種類に分けて考えることが必要である。一つは、被葬者の生前の社会的カテゴリー(身分・階層・職掌・ジェンダーなど)や個人的資質を反映する性格の強い副葬。いま一つは、葬送儀礼を構成するもっと一般的かつ普遍的な慣習としての副葬(供献)で、被葬者個々の社会的カテゴリーや資質とは直結しないものである。前者のうち、とくに職掌と結びついた副葬は、社会的に組織された戦いの遂行を担う軍事集団の存在の痕跡である可能性が高い。いっぽう、身分や階層、ジェンダーの表示と結びついた武器副葬は、支配イデオロギーやジェンダー観と武器や戦いとがどのような関係をもっていたかという武力の観念的側面を示す。また、普遍的葬送慣習としての武器供献において予測できるのは、その武器に、たとえば守護や辟邪の力といった役割が付託されていることである。その背後には、武力の観念的側面のさらに抽象的・原初的な部分をうかがうことができよう。しかしながら、武器副葬の分析によって、それが反映する以上のようなさまざまな側面や部分を腑分けして見極めるのは、容易な作業ではない。

5) **武器形祭器=武器の形を模した祭り・儀式的道具**は、三つほどの種類に分けられる。第一

は、集団ないし共同体全体の祭具やレガリアとして特殊化したもので、日本列島では、弥生時代後半に大形化した青銅製武器形祭器が典型をなす。第二は、弥生時代以降長くみられる武器形木製品のように、土俗的な祭器として用いられたと考えられるものである。これらは、さきに4)の中で挙げた普遍的葬送慣習としての武器副葬と同様、多分に抽象的で原初的な武力の観念的側面を反映していよう。それに対して第三は、個人の権威や身分の表象として各々保持されるもので、寺前直人が「武威器」と称するものに当たるが(寺前 1998)、1)として挙げた通常の武器との区別は分明でなく、4)のうち身分や階層を示す副葬武器として現れることにより、それと知りうる場合もある。この、特定の武器と人との結びつき、すなわち武器の属人化という現象は、先頭戦士や戦闘指揮者といった初現的な軍事身分や職掌の発生と結びついている可能性が高い。同時にそれは、併行して形成されていく戦士のアイデアや英雄像の内容を決定付けるものでもあろう(松木 2001)。

6) 戦士・戦争場面の造型にも2種類がある、一つは、5)として上述したような、共同体や土俗の祭祀の中で生み出されたものである。弥生時代後半の土器や銅鐸に線描された戈と楯をもつ人物の図像は、純粋な戦闘場面の造型でなく模擬戦や儀式の描写と考えられているが、おそらくこれに当てはまる。いま一つは、宗教や政治権力をパトロンとする芸術表現として、その世界観や支配権のイデオロギーの内容を具象化したものである。したがって、そこから読み取るべきものは、一義的にはそうした宗教的世界観や政治的権威の内容と武力との関わり方であろうが、またいっぽうでは当時の武装内容・戦術・戦闘組織などの具体相が描かれているために、それらを詳細に復元するための有効な材料となる。日本列島では武具や戦士をかたどった埴輪が代表的であるが、諸外国には壁画・彫刻・彫像などの例がある。

以上にみてきたように、考古資料として遺されている戦いの痕跡は、佐原が「戦争」とよんだ集団間の実際の戦いだけでなく、それにまつわる有形・無形の多様な事象を幅広く、さまざまな脈絡や程度で反映したものである。いま、それらを「武力(force)」の諸形態として体系的に整理してみると、まず、武力は、有形で可視の物理的武力と、無形で不可視の観念的武力とに分かれる。さらに前者には、個人が保持ないし行使するもの(個人的武力)と社会的に組織化されたもの(社会的武力)とがあるが、そのうち社会的武力は、内的統合や対外戦争に行使される局面と、統合の保持や防衛のために後備されている局面とがある。佐原のいう「戦争」とは、社会的武力が行使されている局面を指す。

このように整理した武力の諸形態と物質的指標との対応関係をあらためてみると、次の通りである。まず、物理的武力のうち個人的武力は、1)武器、あるいは3)殺傷人骨にその痕跡を遺そうが、考古学的に他の形態の武力と区別するのは難しい。次に、物理的武力のうち社会的武力は、さまざまな資料に痕跡を遺す。組織自体の痕跡は、軍事的な職掌を反映する武器副葬のうちに認められるし、それに供給されるべき武器は、その遺物自体の検討を通じた規格性や生

産・流通体制を追跡することによって特定されよう。また、防禦施設の実戦的な発達や殺傷人骨の増加は、社会的武力が大規模に行使されたことの反映であろう。また、支配イデオロギーの正当化を目的として、軍事集団(軍隊)やそれによる戦闘の様相が、6) 戦士・戦争場面の造型として描写されることもある。いっぽう、観念的武力は、おもに、4) 武器副葬のうち普遍的慣習によるとみられる部分や支配イデオロギー・ジェンダー観との関係が現れた部分、5) 武器形祭器、および6) 戦士・戦争場面の造型のうち比較的原初的なものなどに主として反映されるが、1) 守りの村がみせる共同的記念物としての観念的な機能の側面などからも読み取ることができよう。

以上に整理した物理的武力(個人的武力・社会的武力)や観念的武力の相互比重や現出形態は、社会によって多様であり、おそらくその社会の経済的・社会的特性に規定され、ときには逆に経済や社会に影響を及ぼしつつ、イデオロギーや宗教とも不可分の関係をもっていたと考えられる。それぞれの武力のあり方や比重を示す上記のような考古資料を綿密に分析することによって、戦争・平和という単純な二元論を超えた社会分析が可能となつてこよう。

3. 武力の諸形態とエスニシティ

前章では、武力の諸要素を分析する時空的对象あるいは単位として、漠然と「社会」という概念を用いてきた。しかし、社会には、一つの血縁集団や居住集団から、首長を核に政治的に組織された諸集団、一つのエスニック・アイデンティティを共有する範囲、国家、帝国、宗教的版図、文明圏など、さまざまなレベルや枠組がある。前章でみてきた各形態の武力の相互比重や具体的な現出状態が、一つの社会において一定の均質性や統一性をもって現れるとすれば、それは上記のどのレベルや枠組と相応するのであろうか。比較的明瞭に予測できるのは、とくに社会的武力のうちの組織的な軍事集団すなわち軍隊について、それが国家という体制を構成する主要素の一つであることから(エンゲルス、村井・村田訳1954)、それと関連するほかの要素、たとえば王権の支配イデオロギーや国家的宗教と結びついた形での観念的武力の諸側面をも含みこみつつ、国家という枠組とほぼ合致するであろうことである。

それでは、国家の存在しない状態、ないしはその出現前の段階においてはどうかであろうか。つまりそれは、国家の1主要素たる軍隊もほぼ未成立の段階、すなわちそれを中心的な要素とすべき社会的武力の比重が小さいか、明確な組織的核がなく、逆に観念的武力や個人的武力の比重が、相対的に高い状態と予測される。考古資料でいえば、同定が困難でもとより小規模であろう個人的武力についてはさておくとして、防禦施設の共同的記念物的側面、観念的武力を示す慣習的な武器供献、武器形祭器、および比較的原初的な戦士・戦争場面の造型などが、佐原が示した6指標のうちでもとりわけ顕著にみられる段階といえよう。これらの中に、観念的武力のさまざまな要素、すなわち、たとえば僻邪や守護の力の源泉といった武力一般に対する抽象的な思い、

そこから導き出される一種の呪力としての武力観、宗教や世界観と武力との関わり、英雄像、武力をめぐるジェンダー観などが反映されている。あるいは、同定しにくい私闘や殺人・自己防衛などの個人的武力の頻度や出現局面にも、当時の人びとの行動規範や対人観の中で武力がどのような役割や比重をもっていたかという意味での武力観が織り込まれている。

いま述べたような観念的武力ないし武力観は、主として意識や行動様式の位相に関わる事柄であるが、さきに列挙した社会のさまざまなレベルや枠組のうち、それと類似した位相の示準によって把握されるのが、エスニック・グループすなわち一つのエスニック・アイデンティティを共有する集団である。エスニック・グループは、言語・宗教・慣習・行動様式・生業（生活様式）などの文化的一体性を指向し、擬制的同祖同族関係や同胞意識、共通の祖先神話などの架構を介在させつつ、アイデンティティを共有する人びとをいうが、上述のような武力にまつわる観念的諸側面も、それら宗教・行動様式・神話（英雄）などの中に包摂されるものであろう。

国家前の武力、とくにその観念的側面は、このように、エスニック・グループという社会統合のレベルと密接な関連をもって現出するとともに、エスニック・グループの生成や発展の過程において重要な役割を果たしたと予測できる。首長制などの段階を経て古代国家が成立・成熟するプロセスにおけるエスニック・アイデンティティの動態やその果たした役割は、十分には解明されていない。しかし、このプロセスにおいて社会的武力が実質的に成長する際に、その正当化とそこへの精神的求心力の高揚のために、伝統的な英雄像や武力に関する諸観念が動員・強化されることからみて、それが一部をなしていたエスニック・アイデンティティが国家統合に大きな意味をもっていたことは疑いにくい。近現代の多くの国家でも、その統合と「民族」形成との関わりは明白であり、さらにそれが軍事的結集や戦争といった動きに際してプロパガンダとして用いられることは自覚される通りである。このことからさかのぼって類推しても、エスニック・アイデンティティと武力に関する諸観念との関係は、本源的かつ密接であると考えられる。したがって、佐原が示した6指標を詳細に検討し、武力に関する各要素の比重や関わり方、具体的内容などを分析する中から、エスニック・グループの範囲や特質、その形成・転換・変容などについても有効な手がかりを得ることができよう。

4. 事例分析への展望

予察を専らとする本稿の目的からすれば、前章での記述をもってほぼ意を尽くしたといえるのであるが、蛇足として、考古学での具体的事例の分析について、若干の展望を示しておきたい。

佐原の6指標に関してもっとも注目すべき事実は、佐原自身が明示したように、日本列島においてはそのほとんどが弥生時代に入ってから現れることである。このことについて、佐原は、縄文時代には「戦争」といえる行為はまだなく、弥生時代になってからそれが始まったと解釈し、第1章で述べたように、その要因を農耕社会の確立に求めた。しかし、前章までの検討によるか

ざり、事柄はもっと複雑であろう。

6指標のうち武器形祭器は、「石刀」や「石剣」として縄文時代にも存在する。実用とは遠い形態を呈し、属人性はみられないことから、きわめて抽象的な武力の観念が、おそらく僻邪や守護の力などといった具体的意識として、縄文時代の日本列島にも存在していたことが想定できる。なお、縄文時代の殺傷人骨も数例あるが、その発生事由は明確でない。

弥生時代の始まりと同時に、守りの村、実用武器、殺傷人骨、武器副葬が出現し、縄文時代以来の武器形祭器は消える。出現した諸要素は、いずれも朝鮮半島南部に由来し、そこからじかに伝わったものであることは確実である。それらは、一緒に伝わった水稻農耕やその道具とともに、朝鮮半島南部から北部九州に渡来してきたと推測される人びとの遺跡に認められるが、同時に、ないしはわずかに遅れて、北部九州在来の人びとの遺跡にも広く出現する。

これらの事実から導かれるのは、次のようなことである。まず、上記の指標に示される武力の諸要素は、弥生農耕社会の内的発展の中から生み出されたものではなく、朝鮮半島南部という、列島にとっては外部の地域から伝播してきたものであること。および、それは、当初は朝鮮半島南部からの渡来者がもたらしたものではあるが、列島在来の人びとも、ほとんど間髪を入れずそれらを自らのものとしていることである。これらについては、水稻農耕の急速な拡大とともに、農耕地や水をめぐる戦いがただちに広まった状況を示すとみる説(橋口1995)や、先に条件のよい農耕地を占めた人びとが後から来る人びとに備えて防禦を固めたとする考え(春成1990)などの、いわば経済動因説がある。これに対して、藤尾慎一郎は、戦いという問題解決の手段すなわち行動様式自体が水稻農耕とともに伝わり受容されたとする、いわば文化動因説ともいうべき見方を示した(藤尾1996)。

弥生時代からみられる上記の諸要素は、実際上の戦いの行為を中心とする物理的武力から、村の守りの形や武器副葬に反映される武力観や英雄像などの観念的側面にまで及んでおり、武力行使への規制や抵抗が少ない行動様式もまた、このような、物理的側面から観念的側面にまで及ぶ武力の存在形態の総体的体系に組み込まれた要素であった可能性が高い。こうした武力の存在形態一般は、前章でみたように、エスニック・アイデンティティと不可分に結びついたものと考えられる。

縄文時代から弥生時代への変化に関して、松本直子は、主として生業形態の側面から、北部九州在来の諸集団が、農耕をおもな生業とする朝鮮半島南部の諸集団のエスニック・アイデンティティに参入・同化することによって、エスニシティの転換を果たしたとの理解を示した(松本2002)。もとより、武力の存在形態についても、生業とともにエスニック・アイデンティティの根幹をなす一部であることは以上に考えてきた通りであり、朝鮮半島南部に由来するその諸要素を、北部九州の諸集団がきわめて急速に自らのものとしている状況は、松本のいうエスニシティの転換という図式によってもっとも合理的に説明しようと思われるが、詳察は別稿に譲りたい。

その後、弥生時代後半には、武力の諸要素のうちでも武器形祭器の発達が顕著になるが、これは、日本列島にほぼ固有の現象である。同時に、武器の形態や武器副葬の内容にも、朝鮮半島とは異なる列島独自の個性がみられるようになる（松木 2000、2001a）¹⁾。このことは、弥生時代の当初に同化あるいは接近をみせた日本列島のエスニシティが、全体としてふたたび分岐・独立の動きをみせたものとも解釈しうる余地があるが（松木 2002）²⁾、さらに詳細な検討が必要であろう。

おわりに

日本先史時代の考古学的研究は、国家・階級といった特定の社会的カテゴリーやその変化を理論的に設定し、その筋道にしたがって資料を解釈して並べていくという姿勢をもっていた。しかし近年、こうした姿勢を見直し、多様なカテゴリーの設定や解釈枠組の再考などを行う気運が高まっている。エスニシティの考古学的追求もその一翼を担うものといえよう。いっぽう、戦いの考古学的研究についても、もっぱらその物理的・機能的側面を対象とする従来の研究姿勢から、観念の側面をより重視した解釈が意識されるようになってきた。エスニシティの追求と、武力に関するこの新しい考古学的検討との逢着は、今後、認知考古学や構造主義考古学など、日本考古学の分野においては新しい手法をも積極的に援用することにより、双方の研究にとって有効な視点を導くことができよう。

注

- 1) 松木 2002 文献では、武器・武器副葬（英雄像）・武器形祭器などの存在形態から日本列島におけるエスニシティの変化や分岐を論じたが、荒削りな予見にすぎなかった。2001 年中にそれが脱稿した後、2002 年 4 月の考古学研究会第 48 回総会において「地域とエスニシティ」をテーマとした研究報告と討議が行われ、考古資料とエスニシティとを関連付けるための論点の深化が図られた（『考古学研究』第 49 巻第 2・3 号）。エスニシティに関する本稿での考察は、それに大きく依拠している。
- 2) その後、古墳時代への移行とともに、前方後円墳の墓制が列島の広い範囲を覆うようになるが、このことについては、都出比呂志が、日本列島の「民族」形成と関連付けて考察を示している（都出 1993）。

参考文献

- エンゲルス, F. (村井康男・村田陽一訳) 1954『家族、私有財産および国家の起源』（国民文庫版）大月書店
- 佐原 真 1999 「日本・世界の戦争の起源」福井勝義・春成秀爾編『戦いの進化と国家の生成』＜人類にとって戦いとは 1＞東洋書林
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 都出比呂志 1993 「前方後円墳体制と民族形成」『待兼山論叢』第 27 号史学篇

- 寺沢 薫 2000 『王権誕生』<日本の歴史02>講談社
- 寺前直人 1998 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』第45巻第2号
- 橋口達也 1995 「弥生時代の戦い」『考古学研究』第42巻第1号
- 春成秀爾 1990 『弥生時代の始まり』<UP考古学選書11>東京大学出版会
- 藤尾慎一郎 1996 「倭国乱に先立つ戦い」国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』朝日新聞社
- 松木武彦 1995 「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」『考古学研究』第42巻第3号
- 松木武彦 2000 「戦死か刑死か副葬か? — 棺内の石製武器からみた弥生社会像 —」 「文部省科学研究費(地域連携推進研究)古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会『シンポジウム 新方遺跡からの新視点 瀬戸内弥生文化のパイオニア』(シンポジウム講演資料集)
- 松木武彦 2001 『人はなぜ戦うのか—考古学からみた戦争—』講談社
- 松木武彦 2002 「日本列島原始古代武器副葬の展開と社会的諸カテゴリーの形成」藤木久志・宇田川武久編『攻撃と防衛の軌跡』<人類にとって戦いとは4>東洋書林
- 松本直子 2002 「縄文・弥生変革とエスニシティ」『考古学研究』第49巻第2号